
よろずや部

遥胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よろずや部

【Nコード】

N6219D

【作者名】

遥胡

【あらすじ】

天川学園高等部。そこでは、少年少女が少し変わった部活をしていた。その部活とは「何でも屋」。日々を楽しく過ごす為のお手伝い。自分も楽しく過ごす為に。四人のドタバタ学園コメディー

活動内容・よろずや部にて…

桜が満開をむかえ、ひらひらと風に乗って落ち始める頃。

それを、教室の窓から静かに眺めている少女がいた。

さらさらの黒髪を腰ぐらゐまで伸ばし、可愛いとも美人ともとれる、とても整った顔立ちをしている。

しばらくそのまま眺めていると、突然ガラツとドアが開いて一人の少年が入ってきた。

「こんにちはー！つて・・・あれ？千佳ちかちよ、一人？」

少年は、ちよつと語尾を延ばし気味で周りをキョロキョロと見回した。

「こんにちは、太郎たろう君。今日は遅かったね」

少女、千佳ちよこと村上千佳はゆつくりと少年の方を向いて微笑み近くの椅子に座った。

少年、渡辺太郎わたなべ たろうも千佳の近くに行き、机の上に荷物を置いて椅子に座る。

「それがさあ、数学の課題するの忘れてて、居残りさせられちゃったよ。この前のもしてなかったのが不味かったみたい」

と、言いながらケラケラ笑っているところを見ると、不味かったと言つわりに本人はまったく気にしてないようだ。

まあ、それで落ち込んでいる太郎君も想像できないけど・・・。

千佳は、まだ笑っている太郎を見て苦笑した。

千佳にとつての彼は、元気で明るくて活発で、一言で言うなら小猿だ。いや、これは別の人の言葉だ・・・。しかも身近に、小猿といえる人物がもう一人いたりする。

話を戻すが、意外としっかりしていて頼もしい一面もある。それが、渡辺太郎の印象だ。

「ところで、部長達は？」

太郎は机に顎あごを乗せて首を傾かしげる。

「海都君は生徒会で遅れるらしいけど、依実いさねは聞いてないの。どうしたのかしら？」

「依実も先生に捕まっていたりして」

太郎がニヤニヤしながら言うと、千佳は考える風にして言った。

「でも、捕まるような事は特になかったと思うんだけど・・・」

「じゃあ、今日は部活ありませんってオチだったらどうするう？」

太郎が、言い終わると同時に、ドアが開く音と「悪い、遅れた。」という声が聞こえた。

そこには、誰もが認めるであろう美少年が立っていた。

長身で、少しツリ気味の目はキツイ印象を与えるどころか、凛々しさが増し、彼の落ち着いた雰囲気にとってもよく合っていた。

「あつ、海都！生徒会の方は終わったの？」

太郎は顔を後ろに向け、歩いてきた彼、羽橋海都はばし かいとに訊いた。

「ああ。とりあえずはな」

海都はため息をついて、太郎の前の席に座った。

「お疲れ」生徒会ってただでさえ忙しそうなのに副会長だもんな」。大変だろお？」

「あら、大変だからこそ私たちの部活が活躍するんでしょう？」
千佳がにっこり笑って言った。

今までの話でも分かるように、彼女たちは部活でこの教室に集まっているのだ。

ちなみに、書記・渡辺太郎わたなべ たろう、会計・村上千佳むらかみ ちか、副部長・羽橋海都はばし かいとそして

バンツ！！！！

「部活勧誘」！！」

「「「・・・はあ？」」」

勢いよくドアを開けて、突然意味不明なことを言った、年のわりに小柄な彼女が、部長の三浦依実。^{みつら いざね}そして、もう一人の小猿。この四人がしている部活とは、『万屋部』^{よろずやぶ}いわゆる『何でも屋』だ。

『暇ならみんなで楽しく過ごしましょう』ということで、お喋りをしたり、ゲームをしたり、他の部活や委員会の手伝いをしたりと、好きに過ごしているのがこの部活内容。

「だ〜か〜ら〜、部活勧誘だよ！春だよ！？春といえば新入生！勧誘しないでどうすんの！？」

依実は、腕を振り回しながら足をバタバタさせている。

千佳と太郎が、依実の急な発言に不思議がつっていると、その横から、静かだが厳しさも混ざった声が聞こえてきた。海都だ。

「お前、生徒会室の横に立っている木に登ったな」

ビクッ！

その、質問というより確認のような声に、依実は顔を強張^{こわば}らせて動きを止めた。

「えっ！？生徒会室の横のつて・・・すっごく高くなかった？」

「たけえよ。三階にある生徒会室と同じくらいだからな」

海都は、口調をそのまま依実に近づいていく。

「大方、あの木に住み着いてる鳥に餌でもやろうとして登ったら、生徒会の話が聞えたんだらう。今日は、部活紹介会の話もしてたかな」

すると、依実はバツと顔を上げて海都を見上げた。

「すごい！海都、大当たりだよ！」

グイ~~~~~！！

「お〜ま〜え〜は〜、あれほど危ないから登るなと言ったのに、何度言えば分かるんだ！！？」

「いひやひやひやひや！」

海都が、依実の頬^ほを左右におもいきり引っ張ったのだ。

「さすが幼馴染〜、何でもお見通し〜」

太郎がケタケタ笑っていると、千佳が「何度も・・・」と、眩き依実に近い手を握った。

「依実、あの木は本当に危ないと思うの。何度も登っているから大丈夫と思っているのかもしれないけど、もし落ちてしまったらどうするの？そんなことになったら、私・・・」

真剣な目は、少し潤んでいる。

「わ、分かった。あたし、もうあの木に登らない！だから、心配しないで」

依実は、千佳の言葉に感動したようで、同じように瞳を潤ませて、手を握り返した。

「おお、さすが千佳ちゃん。依実の扱いに慣れてきたなあ」

「いや、あいつが単純すぎるんだろ」

後ろで、こんな会話があったことを依実と千佳は知らない。

「で、部活紹介どんなことする？やっぱり、インパクトがあるのがいいよね！」

友情を再確認した依実は、生き生きと話を戻した。

「えっと、そのことなんだけど」

千佳は言いくそに目を逸らした。

太郎も視線を上に向けて目を合わせない。

「？千佳ちゃんもタロンもどうしたの？」

「気まずいんだろ。お前が何も知らないで、無邪気に張り切っているから。」

「え？」

「部活紹介会は、もう三日前に終わってる」

海都の、なんともないという感じのあっさりとしたもの言いに、依実は、何を言われたのか理解するのに数十秒かった。

やっと出た言葉が、

「・・・うそおん」

これだ。

「な、な、なんで言ってくれなかったの！？あたし達の部活、紹介

してないじゃん！」

依実 は机をバンバン叩き、喚きだした。^{わめき}

海都は、ため息をつく。依実の頭に手を置いて、落ち着かせるようにポンポンと叩いた。

「仕方ないだろ？ 紹介会があつた頃は猫探しの依頼で忙しかつたら、今年は止めたんだ。別に、紹介会でじゃなくなつて勧誘の方法はいくらでもあるだろ？」

「うう。そおだけさあ」

「まだ、不満なのか？ 折角、生徒会からの依頼持ってきたのに、断つてもいいのか？」

海都はニヤリと笑つて言つた。

「えっ？ 依頼！？ やるやるやるやるよ！！ どんな依頼！？」

依実 は、「依頼」と聞いて目をキラキラさせて飛び回つた。

どうやら、紹介会のことは忘れたようだ。

「やつぱり、幼馴染なだけあつて扱いはプロだな」

依頼内容を楽しそうに聞いている依実を見て、太郎が感心したように言う。

「違つわ。依実が単純だから、扱いやすいのよ」

千佳がニコニコしながら言つた。

その表情は、本当に楽しそうだ。

太郎は、さつき似たようなことを言つた奴の方を見てクスクス笑つた。

この二人は似たもの同士なのか。

「おい。仕事行くよお。依頼場所は、第二会議室」

依実 は、こつちに手を振りながら、うきうきとドアの方に歩いていく。

海都もその隣で二人を待っている。

千佳と太郎も二人に向かつて歩き出した。

さあ、暇なら私達と楽しく過ごしましょう！

活動内容・よろずや部にて…（後書き）

天川学園高等部生

三浦 依実 みつじ いさね

『よろずや部』部長。2年A組在籍。2月17日生まれ。身長144cmと年のわりに小柄だが、超元気で、超明るくて、超身軽な、考えるよりまず行動の超突進型。天然なところもあり、幼馴染の海都かいとによく世話をやかれる。

羽橋 海都 ははて かいと

『よろずや部』副部長兼生徒会副会長。2年C組在籍。5月8日生まれ。

凛々しい顔立ちに落ち着いた雰囲気で、誰もが認めるであろう美少年。

そのうえ、スポーツ万能、成績優秀、クールだが優しい性格のモテモテ君だが、幼馴染の依実いさねの保護者的存在でもある。

村上 千佳 むらかみ ちか

『よろずや部』会計。2年C組在籍。9月29日生まれ。

腰辺りまで伸ばした長い黒髪と、可愛いとも美人ともいえる整った顔をしている。

しかし、そのせいでいろいろ大変な事もあったらしい。海都かいとに似て、落ち着いていて、依実いさねのことが何かと心配。

渡辺 太郎 わたなべ たろう

『よろずや部』書記。2年E組在籍。10月26日生まれ。
元気で明るく、活発的。依実^{いさね}のいたずら仲間。
だが、結構しっかりしていて頼もしい一面もあり、女子からの人気
も良い。語尾を少し延ばすのが癖。

活動内容・特別活動（前書き）

今回は依実の誕生日ということで、本当は普通の小説みたいにしよ
うかと思ったのですが、いろいろあつて番外編みたいなになりました。
本編まだ1話しかないけど；

活動内容・特別活動

依実 いさね 「2月17日！といえば、あたし三浦依実 みづら いさねの誕生日ー！イエ

イ

海都 かいと 「テンション高いな・・・」

太郎 たろう 「あははは」

千佳 ちか 「ということで、今日は私たちのリーダー、依実との出会いについて語ろうと思います」

太郎 「じゃっ早速、一番付き合いの長い海都からどうぞ」

海都 「確か、俺と依実が初めて会ったのは5歳のときに俺がこっちに引ッ越して来た日だったかな」

依実 「そうそう、海都が越していた家の裏にある公園でだよね！」

太郎 「あゝ、あそこか・・・」

海都 「引ッ越しの片づけが終わって暇になったから、そこで時間を潰してたんだ。そしたらこいつが来て・・・」

依実 「『一緒に遊びましょ』って」

海都 「違っただろ！『いえのかえりかたおしえてえ』って言うって泣き出したんだらうがっ！」

太郎・千佳 「・・・」

千佳 「・・・えっと、確か依実の家って海都君の家の隣だよね？」

海都 「そうだよ、なのに俺は初対面のこいつのために、まったく知らない町を探し回ったんだ！」

太郎 「・・・それでそうだったの？」

海都 「結局、日が暮れても見つかからないから、とりあえず俺の家に連れて帰ったんだ。」

そしたら、俺の母親とこいつの母親が家の前で話し込んでて・・・」

いさねはは
依実母 『あら、依実お帰り。あつ、あなたが海都君ね！初めまして。』

依実、海都君に遊んでもらってたの？よかったわ。

この子の面倒見てくれる子がいて。

同い年で幼稚園も一緒だから、これからも面倒見てくれると助かるんだけど・・・』

かいとはは
海都母 『そんな！こつちこそ、こんなに可愛い子が近くにいてくれてよかったわね、海都。』

依実ちゃん、海都のことよろしくね』

太郎・千佳 「・・・・・・」

海都 「それからは、何かとこいつの面倒押し付けられて」

依実 「押し付けられてとはなによ！仕方ないじゃない！自分の家の隣が知らない人になってたら、

『あれ？あたしの家ここじゃなかったっけ』って思うでしょ！？」

海都 「思わねえよ！」

千佳 「・・・ とにかく、5歳からってことは、もう

12年の付き合いになるのね」

太郎 「まだまだ続きそうだなー」

海都 「・・・ほ、ほら、次はお前らの番だぞっ！」

依実 「？海都なに焦ってるの？タロンと千佳ちよもなんか楽しそう」

千佳 「依実は気にしなくていいのよ」

太郎 「と、言ってもオレらは普通の出会いだったしな」

千佳 「そうよね。私は、中学3年のときに初めてクラスが同じなつて、依実が話し掛けてくれたっていう

普通の出会いよ。まあ、廊下とかでたまに見かけたりとかはしてたから、顔は知ってたけど」

太郎 「オレは、海都の家に遊びに行ってたときに、たまたま千佳ちよを連れた依実と海都の家の前ではったり会った。

ていう普通のだぞ」

海都 「普通普通って、俺のが普通じゃないみたいじゃないか」

太郎 「普通。とはいい難いよな」

千佳 「そうよね」

依実 「そういえば、そのときだよな！初めて4人が揃ったのって！」

太郎 「そおそお　それで依実が、この4人で部活作ろうって言い出して」

海都 「あれは急だったな。太郎となんて、会って30分も経ってなかっただろ」

依実 「だって、前々から作りたいとは思ってたんだもん！でも、良い人がなかなかいなくてね」

千佳 「でも、こうして4人でちゃんと部活できて楽しく過ごせてるからいいんじゃない？」

太郎 「そうだな。これも依実がいたからこそってね」

依実 「いや（デレデレ）」

海都 「あんまり言う調子に乗るから止めとけ」

千佳 「そうね。調子に乗ると何しでかわからないから困ったものね」

太郎 「ここまで部活が何事も無くこれたのは、副部長の努力の賜物だもんな」

海都 「お前らも十分頑張ってくれてるさ」

依実 「ちよ、ちよ、ちよっと！あたしも頑張ってるよ！結構頑張ってるんだよ！

ていうか、今日あたしの誕生日なんだよね！？これ、私の為の企画なんだよね！？

何であたしだけこんな惨めな思いしてるの！？ねえ！ちよ
っと、誰か聞いてー！！」

活動内容・特別活動（後書き）

会話文だけってのは楽しかったです！ノリやすい（´・`・´）でも、読んでる方はこういうのって状況とかわかり難いんじゃないかな？でも、私は楽しく書かさせてもらいました！（それでいいのかな！？）次は本編の方を書くと思います。まあ、1話完結型なので、好きなところから読んでもらって構わないんですけどね（^^）

活動内容・野球部にて・・・

「また負けた〜！」

一人の少女が顔を手で覆い、上を向いて椅子から立ち上がって叫んだ。

体格は小柄だが、その声の大きさからは病弱や大人しいなどの単語とは無縁の性格だとわかる。

その横から、クスクスと笑い声が聞える。

「依実いさねは顔に出やすいから」

まっすぐな黒髪を腰辺りまで伸ばし、日本人形のような整った顔立ちをしている少女が机に散らばったトランプを集めていた。

「そうそう。ばば抜きなんてしたら絶対お前が負けるのに、なんで何回も何回もしたがるかな」

同じようにトランプを集めていた少年が呆れたように言った。

こちらは、少しツリ気味な目が凛々しい美少年だ。

「むっ、だって負けてばかりじゃ悔しいじゃん。それに、あたしそんなにわかりやすすくないもん！普通だよ！千佳ちかちよと海都かいとが無表情すぎるんだよ！」

「いや、お前がわかりやすすぎ」

「いいえ、依実いさねがわかりやすすぎ」

二人同時に同じことを言われ、依実は反論することが出来なくなつた。

この三人は、部活でここに集まっている。

小さいのが、部長の三浦依実みづら いさね。

美少年が、副部長の羽橋海都ははし かいと。

日本人形が、会計の村上千佳むらかみ ちか。

そしてまだ来ていない、書記の渡辺太郎わたなべ たろう。

この四人が『よろずや部』の全メンバーだ。

『よろずや部』の活動内容は、簡単に言えば何でも屋。

他の部活や委員会から依頼があればそれを手伝い、無ければゲームをしたりおしゃべりしたりと好きに過ごす。

そんな部活だ。

「そんなことより、太郎はどうしたんだ？」

「そんなこと!？」

「そうねえ。HRが長びいてるのかしら？そろそろ来るんじゃない？」

ガラッ！

「こんにちはー！」

千佳の言葉を遮って現れたのは、噂の太郎だった。

「タロン遅かったね。何してたの？」

「・・・その前に、そいつ誰？」

海都は依実の質問を流して、この場には異質な存在について尋ねた。

太郎の後ろには、髪が短く日に焼けた肌が健康的な、まさにスポーツマンといった感じの少年が立っていたのだ。

「ふっふっふっ。こいつはオレの友達兼今回の依頼人だ！」

太郎は少年をアピールするように前に引っ張り出した。

「依頼人!？」

「そお、依頼人！オレ偉くない？」

「あら、久しぶりのお仕事ね」

「・・・おい、なんかそいつ困ってるぞ」

きやつきやつとはしゃいでいた三人は、海都の言葉で少年の方を向いた。

少年は力チコチに固まっていて、三人の視線にビクッと体を震わせた。

「・・・ゴホン。まあ、とりあえず」

依実は、少年を中に招き入れるように体をずらし、微笑んだ。
「お話を伺いましょう」

「俺、野球部で矢原っていいいます。・・・あの・・・野球部の宝。
伝説のゴールデンボールを捜して欲しいんです！」

「伝説のゴールデンボール？」

依実と千佳の頭には疑問符が浮かんだ。

その疑問に答えたのは海都だ。

「確か、二十年前ぐらいに甲子園の決勝で逆転ホームラン打ったときのボールだ」

「そうそう。それを矢原が間違って使っちゃって失くしたんだって」

「ふーん。それで、代わりのボールを置いてあるけど、いつバレるかわからないから部活休んで捜しているってところか」

「うっ・・・はい」

矢原は、あまりにもあっさりと凶星を指されて少し戸惑ったようだ。

さらに追い討ちをかけるように依実と千佳が言った言葉は

「バツカじゃないの」

「バカね」

「・・・へ？」

矢原は口をあんぐり開けてポカーンとしている。

はつきり言っただけ面だ。

そんな矢原に、海都は確認するように訊いた。

「野球部のモットーは『仲間を信じる』だったよな？」

矢原は、急に何を言い出すのかと首を傾げた。

「あなたは自分のしたことを隠して、仲間から逃げたのね」

「案外チームのみんなと搜したらあっさり見つかるかもね」

その言葉に、矢原はハッとして俯いてしまった。

依実はそのを見てニヤッと笑うと、人差し指を腕ごとビシッと上に向けて、

「よし！今回の依頼は、ヤハツチを野球部までお届けに変更！」

「えっ？」「……りょかい」「……」

海都と太郎は、矢原の腕をがしッと掴んでドアの方へ引っ張っていく。

「えっ、ちょ、ちよつとまつ……」

「無駄よ。依実は、こうと決めたらなかなか引かないし、私たちもこれには賛成だから」

「まだ抵抗するなら、黙らせて連れて行く方法も……」

太郎は拳を力いっぱい握り締めながらにつこりと笑った。

首をおもいつきり左右に振った矢原は、それつきりしゃべらなかつた。

「おい、あれ矢原じゃないか？」

バットを振っていた少年が校舎のほうを指差した。

「えっ？矢原！？」

「あ、本当だ」

「なんか引きずられてないか？」

不思議がっている野球部員たちに、依実たちはどんどん近づいていく。

「どうも、よろずや部です ヤハツチをお届けにあがりました」

その言葉で、海都と太郎は矢原の腕を離す。

「お届けって……」

矢原の前に一人の野球部員が出てきた。野球部の主将だ。

矢原は目を泳がせて後ずさりしようとしたが、ぎゅっと目を瞑ると、意を決したように前を向き、

「実は、伝説のゴールデンボールを失くしてしまいました！すみません！！」

土下座しそうな勢いで謝った。

「？矢原、何を言っているんだ？ゴールデンボールなら校長室にあるぞ」

「へ？」

「校長の友人が是非見たいとおっしゃるらしいから、一ヶ月前ぐらいに貸したんだ」

「俺、一週間前くらいに校長室でボール見たぜ」

別の部員がその話が本当だということを証明した。

矢原がボールを失くしたのは五日前だ。

「じゃあ、俺が失くしたのは・・・」

「普通のボールだろうな」

主将はあっさりと言った。

これで、矢原の五日間の苦労は無駄に終わったことになる。

「お前、それでずっと部活休んでいたのか？」

矢原は気まずげに頷く。

「バカか！そういうことは部活の問題だ。ちゃんと俺達に言えよ。みんな心配してたんだぞ」

周りから肯定している気配が伝わってきて、矢原の目に涙がうつすら滲む。^{にじ}

しかし、これ以上みっともないところを見せられないと思い、ぐっと堪え、「すみません」と呟いた。

「とにかく、俺達は仲間だ。辛いときや悩みがあるなら何でも相談に乗るから恐がらなくていい。もちろんお前達もだぞ！」

主将は、後ろで話を聞いていた部員達にも伝わるようにと目を向けた。

「さすが、強豪といわれてるチームをまとめてる主将さんだね。」
「しっかりしてるう」

太郎が横にいた海都にコソツと言った。

「さあ、練習始めるぞ！矢原は早く着替えて来い。今年こそ甲子園優勝するぞ！」

「はい！！！」

部員達は元気よく返事をする、自分達の持ち場に走って行った。主将も依実たちに軽く頭を下げてから部員達の後を追う。

「よろずや部のみなさん、本当にありがとうございます」

「いやいや、あたしたちはヤハツチを連れてきただけで、ほとんど何もしてないから」

「でも、連れてきてもらったおかげで助かりました。それに、大切なことも教わりました。だから、ありがとうございます！」

そう言つと、矢原も部活の方へ戻って行つた。

依実はそれを見送り、海都、千佳、太郎へ満足そうな顔を向けた。
「今回の依頼はこれで終了ってことで・・・」

「・・・お疲れー」「・・・」

「あつ、ばば抜き！ばば抜きの続きしよ！」

依実が海都の腕にしがみつく。絶対にするのだというように。

「どうせお前が負けるだろう」

「次は絶対勝つ！」

依実は勢いよく拳をあげた。

が、その拳が海都の顎に当たりこっぴどく怒られ、千佳と太郎がそれを温かく見守ったとか見守らなかったとか・・・。

活動内容・野球部にて・・・（後書き）

すっごく薄っぺらい内容になってしまいました；
まだまだ修行が足りませんね（- -;）

活動内容・特別活動2（前書き）

今回も誕生日企画で『羽橋海都に質問コーナー』です。小説とはいえない、お遊び企画です。

活動内容・特別活動2

1 ・あなたのお名前は？

ははし
羽橋 かいと
海都

2 ・なんと呼ばれてる？

普通に苗字か名前の呼び捨てとか君付けで。

3 ・誕生日と血液型を教えてください。

5月8日生まれのO型。

というか、誕生日なんて今更だろう。

？>文句を言わない！

4 ・身長、体重を教えてください。

身長180cm、体重は65kgぐらいだったと思う。

5 ・趣味と特技を教えてください。

趣味は散歩と読書。特技はバスケットと数学。

太郎>あと、依実の子守り。

！？ちがつ！

6 ・あなたの長所は？

うゝん・・・面倒見がいいところ・・・。

7 ・では、短所は？

考えすぎるところだな。

依実>心配性！

それはお前が無茶するからだろう！

8・あなたがやってみたい事はなんですか？

何も気にせず、一日中静かにのんびり過ごしたい。

依実・太郎>ジジくさっ！

誰のせいだと思っている！

千佳 > (´、v、；、)

9・何か秘密はありますか？

秘密だから言えない。

10・忘れられない思い出は？

いっぱいあるが・・・中学のとき、依実がお化け屋敷のお化け役の人に驚いて

その人に右ストレートきめて、中の道具とか破壊して回ってそれを止めようとした

俺とかクラスの奴らも巻き添えくって、大騒ぎになったことかな。

俺、その時に腕の骨にひびが入った。

お化けよりあいつの方がよっぽど恐かった。(遠い目)

11・恋人はいますか？

いない。

?>今まで一度も？

ない。

?>えゝ本当にい？

ないっ！それより、お前誰だよ！

?>も、文句を言わない！

文句じゃねえし。

12・気になる人いますか？

気になるというか、気にしてないと大変なことになるや

っはいる。

太郎・千佳>あぁ。

依実 >なんでみんなしてこっち見るの？

13・尊敬している人はいますか？

親とか周りの人たち。

14・これからあなたがしなければならないと思っている事は何ですか？

生徒会の仕事。部活内でのいろいろ。

あ、あと依実の木登りを止めさせること、太郎が撮った俺の写真を回収すること。

?>どんな写真？

先生から頼まれた集計をまとめて、千佳に頼んでた荷物を取りに行つて、

?>無視かよ。

それから、それから……

太郎>あ、写真依実にあげたから。

っ!？お、お前、なんてことを(汗)！

15・お疲れ様でした。最後に何かあればどうぞ

ここまでつき合ってくれてありがとう。

これからどうなるか分からないが、どうか見捨てないでやってほしい。

この後、海都は依実の元に猛ダッシュしたとき

活動内容・特別活動2（後書き）

小説サイトでこんな書いていいのかとつても不安なんです、や
ってしまいました。誕生日ということで大目に見ていただければあ
りがたいです（´、`）

他の三人もやりたいです。（反省してない！？）

活動内容・特別活動3（前書き）

誕生日企画

『村上千佳に質問コーナー』
『ということ』
小説とは言えないよ
うな内容のものです。

活動内容・特別活動3

1 ・あなたのお名前は？

むらかみ ちか
村上千佳です。

2 ・なんと呼ばれてる？

依実と太郎君からは「千佳ちよ」

海都君や他の子は「千佳」とか名字で呼んでくれます。

3 ・誕生日と血液型を教えてください。

9月29日生まれのAB型です。

4 ・身長、体重を教えてください。

身長は164cmだったかな。

体重は……女の子に聞くものではないですよ（ニコリ）

5 ・趣味と特技を教えてください。

ピアノと国語が得意です。趣味は紅茶を飲むことかしら。

趣味といえるかわからないけれど（^^;）

6 ・あなたの長所は？

落ち着いているところだと思います。

7 ・では、短所は？

考えが足りないところね。

海都く千佳は十分考えてると思うが。

太郎くそれって依実と比べて？

依実くっ！

8・あなたが好きな事はなんですか？

紅茶を飲むことも好きだけど、依実達と部活をしているときも楽しくて好き。

9・何か秘密はありますか？

秘密というか、あまり言いたくないことはあります。

10・忘れられない思い出は？

中学2年のとき依実が話しかけてくれたときのこと。
忘れられないし、忘れたくない思い出です。

依実くあたしも忘れな〜い

11・恋人はいますか？

いません。

？く過去には？

いません。

？く本当に？

残念ながら。期待に添えなくてごめんなさい。

海都くこんなのに謝る必要はない。

太郎く結局「？」って誰？

？くさ、さあ！次へいこう！（汗）

12・気になる人はいますか？

えっと…顧問の西条先生は気になるかな。少し変わってるから。

太郎く確かに、何考えてるかわかんないしー。

依実くそう？面白い先生だよ。

？くこの人もいつか出したいと思ってます

13・尊敬している人はいますか？

依実と海都君と太郎君。それぞれに良いところがあるから見習わなくちゃ。

14・これからあなたがしなければならないと思っている事は何ですか？

部室の掃除です。結構汚れてるから大掃除しないと。

依実・太郎く大そうじー！！

海都くまた物壊すなよ。

15・お疲れ様でした。最後に何かあればどうぞ

あまり面白い答えじゃなくてごめんなさい。

この先もできるだけ長くお付き合いしていけたら嬉しいです（^^）

活動内容・特別活動3（後書き）

またやってしまいました。

誕生日だから許して企画（笑）もう、メンバー全員するまで許して
としか言いようがありません！（開き直った！？）

しかし、当日にUPできなかったのが残念でした。

今回は、千佳の過去とか新しい人とか出てきましたが、いつかはこ
れらの事も本編で明かせればと思っています。

活動内容・特別活動4（前書き）

再び、誕生日企画！

今回は『渡辺太郎に質問コーナー』
いつものようにお遊び話です。

活動内容・特別活動4

1・あなたのお名前は？

渡辺わたなべ 太郎たろうでつう！

2・なんと呼ばれてる？

太郎とか太郎君とか名前で呼ばれるのが多いよ。
けど依実だけ「タロン」って呼んでるな。

3・誕生日と血液型を教えてください。

誕生日は10月26日！血液型はA！

4・身長、体重を教えてください。

175cmでぐらいで、59kgぐらいかな。はつきりと分らないな。

5・趣味と特技を教えてください。

趣味は動物を拾ってくること！だから家には動物がいっぱいだよ。

特技は英語。ばあさんがイギリス人だから。

依実くそうそう！タロンはクウォーターなんだよね。日本人の血が濃いからわかりにくいけど。

？くつて、ちよつと！勝手にそんな大事な真実あかさないでよ！

海都くなんで今まで言わなかったんだ？

？くいや、ちよつとタイミングがね（テレテレ）

海都く何故、照れる。

6・あなたの長所は？

場を和ませられるよ

7 ・では、短所は？

独占欲が強いところかなアハハ。

8 ・あなたが今一番欲しいものはなんですか？

アレキサンドリア（犬）のブラシ！

あと、エリザベス（猫）の洋服とナポレオン（猿）の首輪と、それから・・・

9 ・何か秘密はありますか？

実は海都のマル秘写真を誰に渡そうか模索中
海都く俺に渡せっ！

10 ・忘れられない思い出は？

色々あるけど、初めて拾ってきたネコが死んだときのこととは忘れられないなあ。

11 ・恋人はいますか？

……………いないよ。

? < 何、その間。

いや、まあ、気にしない気にしない。

12 ・気になる人はいますか？

依実と海都の今後が気になるな（ニヤニヤ）

依実く?。今と一緒にじゃない?

千佳くということは、海都君はずっと依実の保護者役?

海都く……………orz

13 ・尊敬している人はいますか？

やっぱり両親かな。

14 ・これからあなたがしなければならぬと思っている事は何ですか？

海都の写真を誰にあげるか決めるう！

前は依実にあげたから、今度は三年のお姉さま方に渡そうかな

海都くなっ！お前、いったい何枚写真持ってたよ！？

15 ・最後に何かどうぞ。

ここまで付き合ってくれてありがとな

オレの事、ちょっとはわかってくれた（笑）？
これからもよろしくね

この後、海都に追いかけて回されて写真を没収されたとき

活動内容・特別活動4（後書き）

とうとう質問コーナーも3人目！

あと1人でこのコーナーも終わりなので、もう少し付き合っていただけたら幸いです。

ちなみに、太郎のばあさんは日本語ぺらぺらです。

けど、勉強と称して幼い太郎の前では英語ばかりしゃべっていました。本心はただからかって太郎を困らせたかっただけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6219d/>

よろずや部

2010年12月2日15時25分発行